
カッコウの飛び立つ日

さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カッコウの飛び立つ日

【Nコード】

N4162L

【作者名】

さら

【あらすじ】

普通家庭に暮らす小学5年生の七瀬優衣と、あまり学校へ来ない同じクラスの三浦裕也。優衣は「お母さんに殴られた」などと平気で話す裕也のことが、次第に気になっていく。やがてふたりは別れるが、中学生になって再び出会う。それぞれの胸に小さな痛みと、淡い想いを抱えて……

1 お化け屋敷

「あ、七瀬さん」

昨日母親に買ってもらったばかりの、水色のパーカーをはおった優衣に、担任の教師が声をかけた。

「このお手紙、また三浦くんのおうちに届けてくれる？」

そう言っつて、教職二年目の若い女性教師が、学校からのプリントを優衣に見せる。優衣は少し顔をしかめて、後ろを振り向く。すると思つたとおり、黒いランドセルを背負ったクラスの男子たちが、優衣のことをニヤニヤと笑いながら見ていた。

「お願いね、七瀬さん」

一枚のプリントが優衣の手に渡される。担任教師は背中を向けて、忙しそうにバタバタと教室を出て行く。

「七瀬ー、お前、またあのお化け屋敷に行くのかよー」

「お化け屋敷ー、お化け屋敷ー」

優衣は何も言わずにランドセルを背負う。ワインレッドのランドセルの中で、筆箱の音がカタンと鳴る。

べつにあたしだって、行きたくて行くんじゃないもん。

教室を飛び出した優衣の耳に、男子たちの冷やかし声が聞こえてくる。

靴を履き替え校舎の外へ出た。六月の少しべたつく風が、優衣の肩にかかる髪を揺らす。

優衣はプリントを手のひらでぐしゃっと握りしめると、思いっきり走りだした。

学校の前の道路を住宅街へ向かって真っ直ぐ進み、コンビニを通り過ぎて橋を渡る。優衣の家はそのまま直進だったが、三浦裕也の家へ行くには、右に曲がって坂道を登らなければならない。

裕也は小学四年生の二学期に転校してきたらしいが、優衣はその

ことを知らなかった。だけど五年生になって同じクラスになると、一番家の近い優衣が、裕也の家に学校からの手紙を届けることが多くなった。

もう、なんで学校来ないのよ……

そう、裕也は学校を休んでばかりなのだ。だから優衣はいつも届け物を頼まれてしまう。

坂道を駆け上がると、裕也の家が見えてきた。古い洋風の建物には、緑のつたが複雑に絡まりあっている。花でも植えれば綺麗なはずの広い庭は、草がぼうぼうに生えていて、小学生の間でこの家は『お化け屋敷』と呼ばれていた。

優衣はいつものように門を開き庭へ入る。ギイイっという錆びた音が響き、茶色い柴犬風の雑種犬が、優衣に向かってワンワンと吠える。だけどこれもいつものこと。そして、家のチャイムを鳴らすと玄関の前に立ったとき、優衣の頭上から声がした。

「うるせーぞ、シロ！」

ドキッとして顔を上げる。するとベランダから身を乗り出して覗いている、裕也と目が合った。

「これ。お手紙」

ぶっきらぼうにそう言って、右手でプリントを差し出す。『授業参観のお知らせ』と書かれてあるそのプリントは、優衣の手の中でしわくしやになっっていた。

「こんなの持ってこなくてもいいのに」

優衣の耳に裕也の声が聞こえる。ちよっとかすれた特徴のある声。優衣は手を伸ばしたまま、目の前に立つ裕也を見る。裕也は黒くて長い前髪で隠れた目で、ちらつと優衣の顔を見た。

「そんなこと言ったって……先生に頼まれたんだもんっ」

優衣はそう言うと、無理やりプリントを裕也の胸に押し付けた。

裕也は面倒くさそうにプリントを受け取る。

わざわざ遠回りして届けてやったのに！」「ありがとう」の一言くらい言ったらどうなのよ！

「なんで学校来ないの!？」

優衣が怒った声で裕也に言った。どう見ても具合が悪いようには見えない。これからもずつとこの家に、いや、こいつにプリントを届けるなんて……勘弁してほしい。

「弟が病気だから」

意味がわからなかった。どうして弟が病気だと、学校を休まなければならぬのか？

「お母さんうちにいないの?」

「いない」

「弟が病気なの?」

「そうだよ」

「あたしが病気になったら、お母さんお仕事休んでずっと一緒にいてくれるよ?」

優衣の言葉に裕也がふつと笑った。

「な、なんで笑うの!？」

「べつに」

その時部屋の奥から小さい男の子が顔を出した。

「ゆうちゃーん、お腹すいたー」

優衣は思わず部屋の中をのぞきこむ。靴が散らかっている玄関と同じように、部屋の中もごちゃごちゃと物が散乱していた。

「あれ、俺の弟。まだ三歳なんだ」

「あんたが面倒みてるの?」

「そう。病気が治ったら保育園行けるけど、病気が治るまでは俺が面倒みてるんだ」

「じゃあ学校来れないの?」

「学校なんて行かなくてもいいじゃん」

裕也はそう言うつと優衣に背中を向けて歩き出す。

そんなのへん。学校は行かなきゃいけないんだよ?

「あ、お前」

突然裕也が振り返って優衣を見た。

「お前、なんて名前だったけ？」

「七瀬……優衣」

「ありがとな、七瀬」

裕也はプリントをひらひらと振ると、優衣にほんの少し笑いかけ、部屋の奥へ入っていった。

1 お化け屋敷（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

つたない作品ではありますが、心を込めて書きました。
お付き合いいただければ、嬉しいです。

どうぞよろしくお願いいたします。

（現在細かいところを修正中です。内容は変わっていません）

2 雨に濡れて

優衣の家は四人家族だ。会社員の父にパートの母、それから一年生の妹、麻衣。

「お母さん、これお手紙」

「はいはい」

台所で皿に料理を盛り付けている母に、優衣がプリントを渡す。母は濡れた手をエプロンで拭きながら、優衣の手からプリントを受け取る。

「お、今夜はハンバーグか？」

風呂上りの父がキッチンへやってきた。

「パパ、見て！ このハンバーグ麻衣が作ったんだよ！」

「ほんとか！？ すごいな、麻衣は！」

うそばかり。ほとんどお母さんが作ったんじゃない。

父が麻衣と話をしながら、にこにこ微笑んでいる。甘え上手な麻衣は、いつもこの家族の主役に見える。

「あら、授業参観あるのねえ」

「お母さん、来る？」

「行くわよ。お仕事お休み取ってこなくちゃ」

「ママー、麻衣のところにも来るー？」

「もちろんですよ。麻衣は初めての授業参観だもんねえ」

「パパも有給とって行くかなー？」

「え？ ほんとに！ ほんとにパパも来る！？」

麻衣が嬉しそうにはしゃいでいる。父も母もそんな麻衣を見て笑っている。優衣は母の手に揺れるプリントを見つめながら、ほんやりと裕也のことを思い出した。

『学校なんて行かなくてもいいじゃん』

やっぱりヘンだ。あいつも、あいつの家も……

優衣は家族の笑い声を聞きながら、「いただきます」と言っ

ハンバーグを口に入れた。

「あ、優衣おはよー！」

「おはよ、亜紀ちゃん」

優衣が教室に入ると、いつものように亜紀が声をかけてきた。亜紀とは一年生のときからずっと同じクラスで、優衣の一番の仲良しだ。

「ねえねえ、昨日の嵐の新番組見たー？」

「見たよー！ 見た見た！」

優衣がランドセルを置いて、亜紀のいる机に近寄る。そのとき優衣は気づいた。窓際の席で頬杖をつきながら、ぼうつと外を眺めている、裕也の姿に。

「どうしたの？ 優衣」

「来てる……三浦裕也」

亜紀が優衣の視線の先を追いかける。

「ああ、めずらしいね。あいついつつも学校さぼってるもんね」

学校、来たんだ……弟の病気治ったのかな？

「それより優衣さー」

亜紀が優衣の腕をひっぱった。裕也はクラスの誰とも話すことなく、ただどんよりと曇った窓の外を見つめていた。

学校が終わる頃には雨が降り出した。昇降口から色とりどりの傘の花が開き、ばらばらと散らばっていく。

「じゃあね、優衣」

「ばいばい」

優衣は校門の前で亜紀と別れた。亜紀の家は反対方向だから一緒に帰ることはできない。だから優衣はいつも一人で帰る。

同じ方向の女の子たちと一緒に帰ったこともあるけれど、どうも気が合いそうになかった。よく考えると、自分と気の合う友達って亜紀しかいないのかな？ なんて、思ったりもする。

ピンク色の傘をゆらゆら揺らしながら、学校からの歩道を歩く。下級生の男の子たちがふざけあいながら、優衣の脇を追い抜かしていく。

やがて優衣は、川に架かる橋を渡ろうとして立ち止まった。橋の手前の空き地で退屈そうに水溜りを蹴飛ばしている、見覚えのある横顔を見つけたからだ。

「なにやってるの？ 傘持ってないの？」

優衣の声に裕也が顔を上げる。濡れた前髪が額に張り付いている。「いらねーよ、傘なんか」

裕也はそう言って小さく笑うと、またうつむいて水溜りを蹴飛ばした。服も運動靴もランドセルもびしょ濡れなのに気にしていない。「帰らないの？」

優衣の靴にも雨水が染み込み始めている。

「今日はその人がいるから」

「あの人？」

裕也がうつむいたままふっと笑う。優衣はそんな横顔に、昨日はなかった小さなあざがあることに気がついた。

「それ、どうしたの？」

裕也がゆつくりと顔を上げる。

「怪我……したの？」

優衣が裕也の頬を指さす。

「殴られたんだ」

優衣にとって聞きなれない言葉が、胸にズキンと響く。

「だ、誰に？」

「お母さんに」

その言葉はさっきよりももっと強く胸に響いた。ズキンズキンと

……

「あ、あたしのお母さんはぶつたりしないよ？」

「それは本当のお母さんだからだろ？」

裕也がちらっと優衣を見る。

「うちのお母さんは、本当のお母さんじゃないから」

そしてぼんやりと突っ立っている優衣に向かって水を蹴飛ばした。

「きゃっ、なにすんのよ!？」

「さっさと帰れっ」

「あんたは？ いつまでここにいろつもり？」

「ずっといる。帰ったらあの人にまた殴られるから」

優衣は何も言わず……いや、何も言えずに、裕也のこつを見つめた。裕也はそんな優衣に小さく笑いかけると、もう一度足元の水を優衣に向かって蹴飛ばした。

3 夕焼け空の下で

その日、優衣は教室で一人だった。亜紀が『おばあちゃんの法事』
だとかで、学校を休んだからだ。

教室の真ん中にかたまつて、笑い声をあげる女の子たち。一番目
立っている髪の毛の長い子は篠田香織。女子のリーダー的な存在だ。最
近、亜紀もあの子と仲がいい。

あのグループに声をかけてみようかな……一瞬そう思って、優衣
はやめた。きつと香織とは気が合わない。気が合わない子と、無理
してまで一緒にいる必要はない。明日になれば亜紀が戻ってくるん
だから。

そのとき、優衣の耳に男子の大きな声が聞こえた。ふと窓際の席
を見ると、ランドセルを背負った裕也の周りに、数人の男子が集ま
っている。その中心で笑っているのは、サッカークラブに入ってい
る榎本翔。優衣はほんの少し顔をしかめた。

「裕也ー、お前なんで四時間目になると来るんだよ？」

「給食だけ食ってくるなんてずるいぞ！」

裕也が何も言わずにランドセルをおろした。そういえば最近、裕
也が登校してくるのは、いつもこの四時間目の始まる時間だ。

「おい、なんとか言えよ？ お化け屋敷に住んでるくせに」

翔の声に周りの男子がおかしそうに笑う。優衣は席に座ってうつ
むいたまま、両手をぎゅっと握りしめる。するとその瞬間、ガタン
っという大きな音と、女の子たちの「きゃあっ」という悲鳴が聞こ
えた。

「ゆ、裕也が翔を殴ったあ！」

「せんせー！ せんせー、来てくださーい！」

教室中がパニックになっていた。翔は机の間に倒れて半べそをか
いている。

「どつしたの!？」

廊下から担任教師が駆け込んできた。

「先生！ 三浦くんが榎本くんを殴りました！」

「殴った!?!」

優衣は騒ぎを耳に聞きながら、立ち上がって裕也を見た。裕也はそんな優衣に向かって、満足そうに笑いかけた。

校舎から下校時間を告げる放送が流れる。数人の子供たちが校舎から出てきて、優衣の脇を通り過ぎる。

梅雨の晴れ間の空はオレンジ色に染まっていた。校門に寄りかかるようにして、優衣はそんな空を見上げる。巣に帰ろうとしているのか、鳥が一羽、優衣の視界を横切っていった。

そのとき、優衣の隣をすり抜けていく黒いランドセルに気がついた。優衣はあわててその後を追いかける。

「ゆ、裕也っ!」

裕也が振り返って優衣を見る。

「なに?」

「え、あ、あのっ、校長室に呼び出されてたって、ほんと?」

「ほんとだけど?」

優衣はその場に立ち尽くし、どうしたらいいのかわからなくなった。どうしてこんな時間まで、裕也のことを待っていたのか……自分でもわからなかったからだ。すると裕也がそんな優衣を見てふつと笑った。

「校長なんて怖くねーよ。だいたい先生たちは何にもわかってないんだ。理由も聞かないで、暴力はいけません。自分がそんなことをされたらどう思うの? 悲しいでしょう? って……バカじゃねーの?」

「で、でもっ」

優衣が口を開く。

「でもやっぱり、暴力はいけない……と思う」

裕也が優衣の顔を見た。優衣は思わず顔を背ける。

「お前さー」

ふたりの脇を通り過ぎる車の音と、裕也のかすれた声が重なる。

「ざまあみろって思っただろ？」

「え……」

「あいつが殴られて、ざまあみろって思っただろ？」

思った……

優衣は翔のことが嫌いだった。少しサッカーがうまいからって、いつも偉そうにしているし、人の悪口ばかり言ってるし……

立ち止まっている優衣を見て、裕也が笑う。そして優衣に背中を向けて歩き出した。

「ちよ、ちよっと待ってよ！」

そんな裕也を優衣が追いかける。なぜ追いかけるのか……どうしてこいつのことが気になるのか……何もわからないまま……

優衣の前を、振り向かず歩く裕也の後ろ姿が、夕焼け色に染まっていた。

4 シロ

「あ、優衣、おはよー!」

「亜紀ちゃん、おはよう!」

優衣に向かって亜紀が手を振る。やっぱり亜紀がいると安心できるなあと優衣は思う。

「ねえねえ、昨日、裕也がキレたんだった?」

「え……」

ランドセルを机に置いた優衣に亜紀が言った。優衣はちらりと窓際の席を見る。しかしそこに、裕也の姿はまだなかった。

「あいつコワイよねー。やっぱり近寄らないほうがいいね」

「そ、そうだね……」

そのとき、亜紀のことを呼ぶ声がした。顔を上げると、香織と何人かの女の子たちが亜紀に向かって手招きをしている。

「なーに? どうしたの?」

亜紀が優衣に背中を向ける。そして香織たちのグループに入ると、なにやらこそこそと話し出した。時々くすくすという笑い声がもれ、亜紀が優衣のことをちらりと見た。

なんかやな感じ……

そんな優衣の背中を誰かがぼんつと叩く。驚いて振り向いた優衣の目に、大げさなほど大きなガーゼを頬に貼った翔が映った。

「な、なに?」

翔は何も言わずににやにやしている。

「なによ?」

「お前、昨日、裕也と一緒に帰っただろー?」

香織や亜紀たちが一斉に振り向く。翔の周りの男子たちが優衣を見て笑っている。

「お前ら、つきあってんのかぁー?」

翔が教室中に聞こえるような声でそう言った。男子の笑い声がさ

らに大きく響く。

「へえー、七瀬は裕也が好きなんだー」

「あのお化け屋敷が好きなんだー」

なに言ってるの？ こいつら……

優衣が亜紀のほうを向く。亜紀はさりげなく優衣から顔を背ける。香織がそんな優衣を見て、バカにしたように笑った。

「あ、七瀬さん」

担任教師がいつものように声をかける。

「これ、また三浦くんちに届けてくれる？」

優衣の前に差し出された一枚のプリント。教室のあちこちからくすくすと笑い声が聞こえてくる。優衣は黙ってプリントを受け取る。断ろうと思えば断れたと思う。だけど優衣はそれをしなかった。だって裕也のことなんて、なんとも思っていないから。思っていないから、手紙だって届けられる。

プリントを持ってランドセルを背負う。翔たちがにやにやと笑っているのがわかる。

「優衣……」

そんな優衣に亜紀が声をかけた。だがそれと同時に、香織の甲高い声が聞こえてくる。

「亜紀ー！ 行くよー！」

亜紀があわてて振り返る。

「ごめん、優衣。今日、香織たちと帰るからっ」

亜紀の赤いランドセルが、優衣の前から消えていった。

プリントを握りしめて歩道を歩く。一人で帰るのはいつものこと。亜紀と一緒に教室を出たって、どうせ校門の前で別れるんだから…… だけど今日は、何か少しだけ違った。

坂道を駆け上ると、裕也の家が見えてきた。いつものように門を開けて、玄関の前に立つ。しかしチャイムを押そうとして、優衣は

手を止めた。

『殴られたんだ、お母さんに』

裕也のお母さんって……怖い人なのかな？

プリントを持ってきた優衣の前に現れるのは、いつだって裕也だった。だから優衣は裕也の母親に会ったことがない。

玄関の前で戸惑っていると、優衣の背中を誰かが叩いた。

「なにやっつてんだよ？」

少しかすれた男の子の声。優衣は黙って振り返る。そこにはあの茶色い犬を連れた裕也が立っていた。

「なんで学校来ないのよ？」

優衣が持っていたプリントを裕也に差し出す。

「ちゃんと学校来なさいよっ！」

「わかったよ、うるせえなあ」

裕也は優衣の手からひつたくるようにプリントを受け取ると、ぐしゃっと丸めてポケットにつっこんだ。そしてその場にしゃがみこみ、犬の頭を優しくなでた。いつも憎らしく吠えている犬が、クーンと鳴いて裕也にすりよる。

「こいつかわいいだろ？ 俺の犬なんだ」

優衣は裕也につられて、同じようにしゃがみこんだ。どう見ても野良犬のようにしか見えないその犬は、あまりかわいいとは思えなかったけど、裕也は愛しそうに犬に顔をよせる。するとそんな裕也の頬を、犬がぺろぺろとなめて、裕也が声をあげて笑った。

こいつ、こんなふうに笑えるんだ……

優衣はぼんやりと裕也を見つめる。裕也は顔を上げて優衣を見た。

「なに？」

「え、あ、あのっ、その犬の名前、なんていうの？」

「シロ」

「茶色いのに？」

「しっぽの先が白いだろ？ だからシロ」

「ヘンなの」

裕也がおかしそうに笑った。優衣の心臓がなぜだかドキドキと音を立てる。

「こいつ、拾ったときはこんなに小さかったんだぜ？」

優衣の目の前で、裕也が両手で小さい円を作った。

「拾ったの？」

「そう、捨てられてたから、俺が拾ってやったの」

裕也はそう言うと、シロの頭をもう一度なでた。今、優衣の前にいる裕也は、いつもの反抗的な態度の彼とは別人のように見えた。

そのとき、シロが身をよじり、いきなり吠え出した。それと同時に門の外から人影が現れる。

金髪のような髪に派手な化粧をした若い女が、この前見た裕也の弟の手を引いている。優衣は反射的にその場に立ち上がった。

「ちよっと！ その犬、早く捨ててきなつて言ったじゃん？」

女がシロをにらむように見てそう言った。

もしかしてこの人がお母さん？ 裕也のことを殴るお母さん？

そう思ったら優衣の体がこわばった。そしてしゃがみこんでいる裕也の背中も、同じように緊張しているのがわかった。

「聞いてんの！？ 裕也！ まったくぐずなんだからっ」

女がいらいらした口調で言いながら、家の中へ入っていく。

優衣は黙って裕也を見下ろした。しばらくシロの頭をなでていた裕也がすくつと立ち上がり歩き出す。

「ゆ、裕也……」

「帰れよ、もう……」

裕也が背中を向けたまま、消えそうな声でそうつぶやいた。

それからもずっと、裕也は学校へ来なかった。

『わかった』って言ったのに……嘘つき。

亜紀とは普通に話をしていた。だけどどこかぎこちないことに、きつと亜紀も気づいていたはず……優衣はいつしか自分から、亜紀と距離を置くようになり、教室ではいつも一人でいることが多いな

った。

そしてそのまま一学期が終わり、夏休みが始まった。

5 鳥になれたら

その日は日曜日だった。優衣は家族と一緒にショッピングセンターへ買い物に出かけた。

「パパー、これ買ってえ」

おねだり上手の麻衣が、新しいサンダルをねだっている。

「しょうがないなあ。優衣はなにか欲しいものないのか？」

「あたしは……ないよ」

「優衣はしっかりしてるからね。麻衣みたいになんでもかんでも欲しがったりしないのよ」

母がそう言って笑う。

「しっかりしてる？ そんなことない。ほんとはあたしも甘えたい。だけどそれより先に、麻衣が甘えちゃうから……」

「パパー、お腹すいたあ」

「じゃあレストランでも寄ってくか？」

「あたしハンバーグ食べたーい！」

「またハンバーグ？ 麻衣はそればかりだな」

麻衣が父と手をつないで歩いていく。母もその隣に並んで歩く。

優衣はぼんやりと、そんな三人の背中を見つめていた。

「もうお腹いっぱいだよー」

「麻衣、よくあんなでかいパフェ食べたなあ」

ファミレスで食事をして、父と麻衣が店を出て行く。会計をしている母の後ろで、優衣は黙って立っていた。そしてそんな母の向こうに、優衣は偶然見てしまった。

若い母親が「こぼさないで食べなさい」などと言って、小さな男の子の口に料理を運んでいる。短髪で体格がよくて、ちよつと怖そうなお父さんは、なにも言わずに昼間からビールを飲んでいる。

楽しそうとは言えないけれど、普通といえれば普通の、家族の風景。

ただどこそこに裕也の姿がない。それに気づいたのは優衣だけなのだ。
「どうしたの？ 帰るわよ、優衣」
「う、うん」

会計を済ませた母が店を出て行く。優衣はもう一度あの家族の席を見たあと、急いで母の背中を追いかけた。

車が家のガレージに着いた。父と麻衣が笑いながら、荷物を持って家に入る。だが優衣は家へは入らず母に言った。

「あたしちよつと出かけてくるね」

「あら、どこに？」

「友達の家。すぐ帰るから」

駆け出す優衣の背中を母が見つめたが、気にも留めずに、すぐ家の中へ入っていった。

セミの鳴き声が耳に響く。坂を駆け上がる優衣の額に、じんわりと汗がにじむ。やがて優衣は見慣れた家の前で立ち止まり、門を開けて庭へ入った。

夏になってさらに草が生い茂った庭の中から、シロがワンワンと吠えてくる。激しく振っているシロのしっぽの先は、やっぱり白い。優衣はあの日の裕也の笑顔を思い出しながら、息を整え玄関の前に立つ。するとそんな優衣の頭上から、聞きなれた声が聞こえた。

「ななせー！」

優衣が顔を上げる。ベランダから体を乗り出すようにして、裕也が優衣を見ている。

「上がってこいよ？ 鍵開いてるから」

優衣は黙ってうなずくと、裕也の言うとおり玄関のドアを開けた。

裕也の家の階段をゆっくりと上る。狭い階段には何やら荷物がいっぱい置かれていて、すぐく上りにくかった。

裕也のお母さん、片付けしないのかな……

人の家のことをとやかきうものではないと思うけど、どう見ても優衣の家とは違いすぎた。優衣の家は母がきちんと掃除も片付けもしてくれるから、家の中がこんなに散らかることはない。庭の草だって、伸びれば父が刈ってくれるし……つまり『お化け屋敷』などとからかわれるのは、裕也のせいではないはずなのだ。

二階に上って裕也の部屋をのぞいた。裕也はベランダの手すりにもたれて、背中を向けている。そしてその向こう側には、広々とした景色が広がっていた。

「わあ、すごい、景色いいっ」

「だろ？」

思わずベランダに駆け寄った優衣に、裕也が自慢げにそう言った。高台に建つこの家のベランダからは、優衣の住む街が見渡せた。

地方にある、なんにもないこの街。住宅街の向こうに小学校が見えて、もっと向こうに駅と線路が見える。そしてその先には緑の山々が連なり、顔を上げれば青い空がどこまでも広がっていた。

「気持ちいいねー」

いつの間にか優衣は裕也の隣で、景色を眺めていた。蒸し暑い風は、決して爽やかとは言えないけれど、優衣はその風を全身で受けとめた。裕也と一緒に見上げた夏空に、一羽の鳥がすつつと飛んでゆく。

「ねえ、今日は弟いないの？」

優衣が空を見ながらつぶやいた。

「親と飯食いに行ってるよ。あいつは本当の子供だから、優しくされてんだ、わりと」

そう言って、裕也がふつと笑う。優衣はそれきり何も聞かなかった。

『あんたは一緒に行かないの？』

その質問の答えは、聞かなくてもなんとなくわかったから。きっと、裕也はこう言うだろう。

『俺は連れて行ってもらえないんだ。本当の子供じゃないから』

二人はしばらく何も言わずに景色を眺めていた。やがて裕也が独り言のようにつぶやく。

「鳥になれたらいいのになあ……………」

優衣が裕也の横顔を見つめる。

「鳥になれたら、こんな街すぐに出て行けるのに……………」

裕也のかすれた声が、優衣の胸に染み込んでいく。深く、深く……………」

あたしも鳥になれたら……………」

学校のこと、友達のこと、家族のこと、全部忘れて……………」

裕也と一緒に飛んで行くのに……………」

「あー、腹減ったあ」

裕也がベランダの手すりをつかんで両手を伸ばす。

「あたし、チョコなら持つてるよ」

ポケットの中をごそごそあさって、キャンディーみたいに結んである、二つのチョコレートを取り出した。そしてそれを裕也の手のひらに握らせる。

「あげる」

裕也はそんな優衣に笑いかけると、ひとつを優衣の手の中にもどし、ひとつを口の中に放り込んだ。

「うっめー！」

裕也が嬉しそうに笑っている。優衣もチョコレートを開けて口に入れる。

甘いミルクチョコレートのはずだったのに、その日のチョコは、なぜかほろ苦い味がした。

6 嘘と涙

「おねえちゃん、プール行こうよー、プール！」

「うるさいなあ、麻衣は……」

「優衣。麻衣をプールに連れて行ってあげて？ 暑いからいいじゃない？」

夏休みは退屈だった。もともと友達の少ない優衣だったが、亜紀と遊ばなくなった夏休みは、やっぱり寂しかった。

ひとりぼっちは嫌だ……

このまま学校が始まるのが怖いと思い始めた頃、亜紀から電話がかかってきた。

「優衣、今日遊べる？」

「う、うん。いいよ」

「今からあたしのうちにおいでよ」

「え、いいの？」

「うん。待ってる」

久しぶりの亜紀の誘いに、優衣は心を躍らせた。

亜紀の部屋には、香織とそのとりまきの女の子たちが集まっていた。

「香織たちも一緒なの。いいよね？」

亜紀が優衣の顔を伺うようにささやく。

「……うん」

そう答えるしかなかった。すると優衣に向かって、香織が手招きをしてきた。

「ねえねえ、優衣」

周りの女の子たちがくすくすと笑う。

「優衣って、ほんとに裕也とつきあってんの？」

「っ、つきあってないよ」

香織が優衣を見てふふつと笑う。

「だよー。あいつ翔のこと殴ったりして、マジむかつくしー」

「あはは、香織って、翔のこと好きだもんね」

「好きだよー、翔ってサッカーうまくてかっこいいじゃん？」

優衣は床に座って、ぼうつと香織たちの声を聞く。すると女の子たちの笑い声にまぎれるようにして、香織がそつと優衣に尋ねた。

「じゃあさ、優衣も裕也のこと、嫌い？」

優衣はぼんやりと香織を見つめる。

「ねえ、嫌い？」

「……うん。嫌い」

香織がくすつと笑い、また女の子たちと話し出した。

彼女たちの話題はいわゆる恋バナ。　くんがかっこいいとか、

くんが好きだとか……だけど優衣には『好き』という感情がよ

くわからなかった。ただ……

あたし、嘘ついた。

裕也のことを、『嫌い』じゃないことだけは、わかっていた。

それから香織たちは優衣のことを誘ってくれた。きつと『仲間』と認めてくれたのだらう。

香織とはやつぱり気が合わないと思ったけど、優衣は彼女に合わせるようにした。そうすれば寂しい思いはしなくてすむ。亜紀とも一緒にいられる。二学期になってもひとりぼっちになることはない。

これでいいんだ。これで……

そして一度も裕也と会うことのないまま、夏休みが終わった。

「授業を始める前に、みなさんにお知らせがあります」

二学期最初の日、担任教師が黒板の前で言った。

「三浦裕也くんがおうちの都合で引越しました。学校も新学期から、別の小学校へ転校しました」

教室中がざわめきだす。優衣は担任教師の姿を、ただぼんやりと

見つめていた。

「裕也って翔のこと殴ったじゃん？」

休み時間、とりまきの女の子たちを集めて、香織が親から聞いたとかいう話を自慢げに話し出す。優衣もそんな香織の話を黙って聞いていた。

「でさ、翔のお父さんってPTAの会長でしょ？ 裕也の家に怒鳴り込んでいったんだって。『うちの息子になんてことするんですか！』って」

「うわー、マジ？」

「けど裕也のお父さんもヤクザみたいな人だからさ。そんなことで引き下がらないで、ケンカになったらしいよ。でも結局『ふざけんな！ こんな学校こっちから出てってやる！！』って、裕也のほうが出て行くことになったんだって」

「うそー」

「こっわー」

女の子たちが騒ぎ出す。優衣はさりげなくそんな輪から抜けた。

「優衣？ どこ行くの？」

教室から出て行く優衣の背中に、亜紀が声をかける。

「ごめん、ちょっとトイレ」

優衣は廊下を駆け出した。トイレのドアをバタンと閉めて鍵をかける。その瞬間、こらえていた涙がぼろぼろとあふれ出した。

「う……え……ええん……」

雨に濡れた黒いランドセル、ふたりで歩いた夕焼けの道、鳥になりたいと思った真夏の空、シロに頬ずりしたときの裕也の笑顔……優衣の胸に、裕也との思い出があとからあとからこみ上げてくる。

「ごめん、裕也……嘘ついてごめんねえ……」

『嫌い』なんかじゃない。『嫌い』なんかじゃないよ。

裕也と、もっと一緒にいたかった……

そう思ったら、優衣の目からまた涙があふれてきた。

6 嘘と涙（後書き）

小学生編はここまでです。

次回から中学生編になります。

よろしくお願いします。

7 再会

昨日からの強風で、校庭の桜はすっかり散ってしまった。運動部が、じゅうたんのようにつまみ詰められた花びらの上を、掛け声をかけながら走っている。優衣は夕日に照らされたそんな光景を、ぼんやりと眺めていた。

「優衣ー、お待たせー！」

風で乱れる髪を手で押さえながら現れたのは、同じクラスで同じ吹奏楽部の青木恵美だ。

「ごめんねえ、先輩に引き止められちゃってさー」

「ううん、大丈夫だよ」

優衣が恵美に笑いかける。

「わー、見て、すごい夕焼けー」

「明日も晴れるね」

「なんで？」

「夕焼けだと明日は晴れるんだよ？」

「へえー、知らなかったあ」

恵美がえへっつと笑う。優衣も恵美と一緒に笑う。

違う小学校出身の恵美とは、中学に入ってから仲良くなった。今一番仲がいいのはこの恵美だ。そして昔から友達の多くない優衣に、他に親友と呼べるような子はいない。だけどそれでもいいと思った。やっぱり大勢とつるむのは苦手だから。

小六でクラスが別れた亜紀とは、だんだん一緒にいることがなくなって、今ではほとんど話すこともない。バレエ部に入った亜紀が、部活の仲間と楽しそうにしている姿をよく見かける。

同じように香織とも離れていった。積極的に顔立ちも綺麗な香織は、中学に入っただけで彼氏ができたとか、もう別れたとか……そんな噂を時々耳にする。

「あーめんどー。明日英語のテストじゃん」

恵美がスクールバッグをぶらぶら振りながら空をあおぐ。

「ねえ優衣ー、英語のノート写さしてくれないー?」

「あ、どうしよう。ノート、教室に置いたままだ」

「えー?」

「取りに行ってくる。恵美ちゃん、ちよつと待ってて」

「もー、優衣はしつかりしてるようで抜けてるんだからあ」

恵美に笑われて苦笑いしながら、優衣は校舎の中へ戻った。

運動部の掛け声も消えた、下校時刻の過ぎた学校は、やけに静まり返っていた。優衣は上履きに履き替え教室へ向かう途中、職員室の前を通った。

カララ……と小さな音がして職員室の扉が開く。制服姿の男子生徒が出てきて優衣とすれ違う。

しんとした空気が漂う廊下。窓から差し込む沈みかけた夕日。優衣はふと立ち止まり、後ろを振り返る。

「……裕也?」

優衣の声が廊下に響く。職員室から出てきた生徒がゆっくりと振り返る。

「なんだ、七瀬じゃん」

優衣の目の前に裕也の姿があった。あの頃、優衣とあまり変わらなかつた背丈がぐんと伸び、顔もほっそりとしたような気がする。

そしていつも聞いていたあのかすれた声も、心なしか低いトーンに変わっていた。

「な……んで?」

ぼつぜんとしながら、なんとかつぶやく優衣に、裕也が言った。

「俺六組。お前は?」

「さ、三組……」

優衣の声に裕也はふつと笑う。その冷めたような笑い顔は、あの頃のままだった。

「ちよつと、三浦くん! まだ話は終わってないわよ!」

職員室から六組の担任教師が飛び出してくる。

「じゃあな！」

裕也は優衣にそう言つと、背中を向けて廊下を走り去っていった。

8 頼みごと

裕也がこの学校にいた。でもそれはありえないことではなかった。あの二学期の初めの日、担任教師が言ったように、裕也は『お化け屋敷』と呼ばれていた家を引越してしまったけれど、きつとまだこの街に住んでいたんだ。そしてこの街の違う小学校に通っていた。だから三つの小学校が集まってくるこの中学に、裕也がいてもべつに不思議ではなかった。

優衣の前では、昨日のテレビの話しながら、恵美が弁当を食べている。恵美に聞いてみようか……もしかしたら裕也と同じ小学校だったかもしれない。

いきなりそんなこと聞いたら、おかしいよね？

「どうしたの？ 優衣」

「あ、べつに……」

優衣がそう言って苦笑いしたとき、クラスの女の子がふたり、優衣たちの机に寄ってきた。

「ねえ、七瀬さん」

優衣が箸を持ったまま顔を上げる。恵美と同じ小学校だった千夏と美咲だ。

「確か七瀬さん、北小だったよね？」

「うん。そうだけど」

千夏と美咲が『やっぱり』というように顔を見合わせる。

「七瀬さん、六組の『三浦裕也』、知ってるでしょ？」

「え……」

突然千夏の口から出たその名前に、優衣の心臓がトクンと動いた。

「五年の一学期まで北小にいた、三浦だよ」

「あ、うん。知ってるよ」

千夏がもう一度美咲を見てから言う。

「七瀬さん、三浦と仲良かったってほんと？」

「え……べつに仲良くなんて……」

「でも話せる？」

「は、話せるけど……」

すると千夏がにこつと笑って、そして優衣の耳元にこつそり話しかけた。

「好きな人いるかどうか、聞いて？」

優衣がぼんやりと千夏の顔を見る。

「好きな人いるか、三浦に聞いて？」

教室のドアが開いて、男子がふざけながら入ってきた。いつも騒がしいサッカー部の連中だ。教室の中がいきなりざわめきだす。

「な、なんで？」

優衣がつぶやく。千夏はまた美咲を見てから、優衣の耳元でささやいた。

「美咲が三浦のこと好きなんだつて。だから聞いて？　お願い」

優衣は美咲に視線をうつす。美咲は少し顔を赤くして千夏の袖をひっぱった。

「じゃあ、お願いね！　七瀬さん！」

千夏がそう言っつて、美咲と一緒に背中を向ける。

どうしてあたしが聞くの？　自分で聞けばいいのに……

「三浦のこと調べるつて？」

黙って弁当を食べていた恵美が、優衣の顔を見ないまま言った。

「え、あ、うん」

「美咲も好きなんだあ、三浦のこと」

「美咲も……つて？」

恵美が顔を上げて、箸で優衣のことをさす。

「知らないの？　六組の三浦っていえば、有名じゃん。ちょっと不良っぽくて、かっこいいつてさ」

「知らない……」

「ほら、あんたと同じ北小だった、二組の『篠田香織』。あの子も三浦狙いだし」

篠田香織……あの子が？ だってあの子は、裕也のこと嫌っていたはず。

「でもさ、三浦ってやっぱコワそうじゃん？ 今朝も顔に傷つくつてて、西中のやつらとケンカしたとかいう噂だし……だからみんなビビって、声かけられないんだよ」

優衣はさりげなく恵美から視線をはずし、教室の窓を見た。四角い窓の向こうには青い空が広がっていて、あの夏に裕也と見た、夏の空を思い出した。

「ただいま」

部活が終わって家に帰る。部屋の中から『お帰り』という声はなく、薄暗いキッチンに母が一人座っていた。

「お母さん、ただいま」

「ああ……優衣」

「ご飯は？」

母がテーブルの上のバッグから財布を取り出し、五百円玉を優衣の前にすべらせる。

「これで買ってきて」

「麻衣の分は？」

「あの子は友達の家で食べてくるって」

母は生氣のない声でそう言って立ち上がると、奥の部屋へ入っていった。

優衣は五百円玉を握って靴を履く。母が夕飯の支度をしなくなったのはいつからだろう。あんなに好きだった料理も部屋の片付けも……母は家事のすべてを放棄して、毎日をぼんやりと過ごす。

お父さんのせいだ。

父に女がいることを、優衣は知っていた。父と母の口論を何度も聞いていたから。何年か前のような温かな家庭は、もうこの家にはない。いや、もしかしたらあの家庭も、すでに作り物だったのかもしれない。

優衣は自転車に乗って走った。近所のコンビニで毎日弁当を買うのは恥ずかしかったから、わざわざ遠くの店を何件か回るのが、いつの間にか習慣になっていた。

今夜は駅の近くにあるコンビニに入り、弁当を手を取った。そして何気なく、お菓子売り場に目を向ける。そこでは五歳くらいの男

の子が店内をきよるきよると見回していて、やがてひとつのお菓子を服の中に隠し、走り出した。

「あー！」

男の子の顔に見覚えがあった。不審な動きをしていたその子を、店員が呼び止めようとする。

「あ、あのつ、ごめんなさい！ あの子私の弟なんです。お金払うの忘れちゃったみたいなんで……私が払いますっ」

優衣は怪訝な顔をしている店員の前に五百円玉を置くと、店を飛び出し男の子の後を追った。

店を出てあたりを見回す。優衣の目に、住宅街のほうへ走っていく男の子の姿が見える。

「ちよつと待ってー！」

優衣の声に気づいているのかいないのか、男の子は振り向かずにとんどん走る。

あの子、見たことある。

優衣が男の子を追いかける。その子は住宅街を抜け、小さな公園へ駆け込んだ。

「ゆうちゃん！ とつてきたー！」

息を切らしながら、男の子がベンチの前で止まった。そして、ベンチに座っている。『ゆうちゃん』にお菓子を差し出す。

「これだけかよ？ ヘタクソがっ」

「だって……見つかつちゃうよ……」
「やっぱりそうだ。」

優衣が黙ってベンチに近寄る。男の子が振り向き、ベンチに座っている少年が顔を上げる。優衣はその顔を思いつきりひっぱたいだ。
「いてっ」

「裕也っ！ あんた、弟になんてことさせてんのよっ！」

優衣の声があまりにも大きかったので、裕也の弟が驚いて泣きそ

うな顔をした。

「暴力はいけないんだろ？」

「話そらさないでよっ！ それ万引きでしょ!?!？」

裕也が黙って優衣を見た。優衣はぎゅっと両手を握りしめる。

「慎吾。もう帰っていいぞ」

「う、うん」

裕也の声に弟が逃げるように公園を出て行く。誰もいない薄暗くなつた公園に、優衣と裕也だけが残つた。

「まったく、あいかわらずうるさいんだから、お前は」

裕也が優衣の前にお菓子をちらつかせる。

「わかつたよ。もうやらないし、やらせない」

「本当にわかつてるの!?! 自分のしたことが」

「わかつてるって」

公園の切れかけた外灯の下で、裕也が優衣の顔を見た。優衣の瞳にあの懐かしい裕也の顔が映る。優衣がひっぱいたのとは反対の頬に、恵美が言っていた傷がついているのがわかつた。

「なんだよ？」

「え？」

「まだ他になんかあるのかよ？」

裕也が面倒くさそうに言う。優衣は言おうかどうか迷いながらも、裕也の頬を指さした。

「それ、どうしたの？」

裕也は少し不思議そうな顔をしたあと、小さく笑って優衣に答えた。

「昨日うちのばあがキレてさ。俺に皿投げつけんの。最近は素手だと俺にかなわないと思って、物投げてくんだよな。まあ、いつものことだけど」

優衣は裕也の笑顔から目をそらす。そして裕也の座っているベンチに、ひとり分くらい隙間をあけて、遠慮がちに座った。

ふたりはそれから何も言わなかつた。空に残った夕日のかすかな

明るさも消えて、あたりはすっかり暗くなっていた。

『好きな人いるか、三浦に聞いて？』

優衣の頭の中に、千夏の声が聞こえてくる。

聞かなきゃ……

今聞くしかないと思った。学校でふたりきりで話せる機会なんてないと思うし……顔をひっぱいた後に聞くのもどうかと思うけど……しかし優衣の口から出た声は、全く別の言葉だった。

「シロ、元気？」

優衣が前を見つめたままつぶやく。裕也はいつものように軽く笑って優衣に言う。

「死んだよ」

「え？」

驚いて隣に座る裕也を見た。

「俺がいない間に処分場につれていかれた。殺されたんだ」

優衣は何も言えなかった。シロに顔を寄せて笑った、あの日の裕也が忘れられなかったのに……

「七瀬？」

裕也の昔と少し違う、でもやっぱり変わっていない、かすれた声が聞こえてくる。

「泣いてんの？」

優衣は思い切り首を振る。だけど涙が後から後からあふれてきて、制服のスカートにぽたぽたと落ちる。

五百円玉使っちゃった……今日はお弁当買えないな……

そんなことを思いながら、優衣は涙が止まらなかった。裕也はそんな優衣の隣で、何も言わずにずっと、暗くなった空を見上げていた。

10 ふたりで歩く帰り道

「おはよー、優衣」

「おはよ、恵美ちゃん」

朝、恵美と出会って、一緒に廊下を歩く。

「だるー、今日の体育マラソンだったー」

「え？ほんとに？」

「もつさばるしかないよねー」

恵美が面倒くさそうにバッグを振っている。優衣はそんな恵美の隣を歩きながら、ふと窓際に立つふたりの姿を見た。恵美もそれに気づき、優衣の腕をつんつんと突付く。

「あれ、篠田香織と三浦じゃん？」

シャンプーのCMのような、さらさらした長い髪の香織が、嬉しそうに裕也に何か話しかけている。

嫌いって言ったくせに……

優衣は心の中でつぶやきながら、ふたりの脇を通り過ぎる。香織がちらりと自分のことを見たのがわかる。そのとき優衣の耳にあの声が聞こえた。

「なーなせ！」

優衣が驚いて振り返る。裕也の手から何かが投げられる。それは朝の光に反射して銀色に輝き、優衣の差し出した手のひらにぽとんと落ちた。

「昨日の菓子代。払ってくれたんだろ？」

裕也が小さく笑って背中を向ける。

「あ、ちよつと、裕也あ」

甘えたような声を出して、香織がその後を追っていく。

優衣はぼんやりと手のひらを見つめる。そこには一枚の五百円玉が、大事な宝物のように光っていた。

「七瀬さん」

千夏に声をかけられたのは、その日の昼休みだった。

「聞いてくれた？ この前言ったこと」

「ごめん……まだ……」

優衣の前で千夏がわざとらしくため息をつく。

「あんた今朝だって三浦に何かもらってたじゃん？ 早く聞いてよ！」

千夏が大きな声をあげたので、何人かの生徒がこちらを振り向いた。

「だつたら自分で聞けば？」

ついで口に出しそうになったその言葉を、優衣は必死に飲み込む。

「ねえ、わかつたの!？」

「……うん」

「じゃ、お願いね」

千夏が短めのスカートをはひるがえして、こちらをうかがっている女子生徒たちの中へ入っていった。

断ればいいのに……

優衣は机の上で両手を握る。

「そんなの聞きたくないって、断ればいいのに……」

千夏たちのグループが笑い声をあげる。

断る勇気なんてなかった。断ったらきつと、この教室に居づらくなる。あの子たちのこと、友達だなんて思ってないけど……やっぱり嫌われるのが怖かった。

「ただいま……」

家の中は今日も薄暗かった。テーブルの上に五百円玉がひとつ置いてある。優衣はそれをポケットに入れると、いつものように自転車に乗った。

夜の始まりの風を受けながら、優衣は自転車をこぐ。いくつかのコンビニを通り過ぎると、あの日裕也の弟と出会った店が見えた。

入るのにほんの少しためらったけど、優衣は思い切って店のドアを開く。「いらっしやいませえ」と言う、店員のだるそうな声が聞こえた。

「なんであたし、またこの店に来たんだろう……」

弁当を選びながらぼんやりと考える。するとそんな優衣の背中を、誰かがぽんと叩く。

「よく会うな？ 俺たち」

優衣がゆっくりと振り返る。私服に着替えた裕也が、優衣の前で笑っている。

「ほんとに会えた……」

優衣は弁当を持つ手に力をこめた。

自転車を押しながら裕也と歩く。裕也はコンビニで買ったスポーツドリンクを開けて、一気に飲む。

「それ、夕飯？」

「自転車のかごに乗せてある弁当を見て、裕也がつぶやいた。」

「う、うん。裕也も？」

「そう」

裕也はぶら下げていたコンビニの袋を、目の高さに持ち上げてガサッと揺らす。だけどその中にはおにぎりがひとつ入っただけ。足りるのかな？ 男の子なのに……

優衣の耳に、あの夏の日に聞いた「腹減ったあ」と言う声が聞こえてきそうだ。でも今の優衣のポケットに、チョコレートは入っていない。

「裕也……」

優衣が消えそうな声でつぶやく。

「裕也は……好きな人、いるの？」

「なんで？」

裕也の声に、胸がきゅっと詰まりそうになる。

「だ、だって、あんたモテるくせに彼女とかいないみたいだし」

「好きなやつ、いるよ」

その言葉に弾かれるように、優衣は裕也の顔を見た。

「香織じゃないけど」

裕也がいたずらっぽく笑う。

「美咲でもないけど」

「なんで美咲のこと……」

優衣がつい声をあげる。

「だってあいつらいつつも集団でこそそそしてさ。俺と美咲をくっつけようとしているのバレバレだし……そういうの、うざいっての」

裕也はふつと笑うと、優衣を見た。

「言いたいことあるなら自分で言えよ。なあ？ お前もそう思わね？」

うん、思った……

「いつもつるんで、自分の意思で動けないやつって、バカじゃんって思わね？」

うん、でも……それを言ったらあたし、きっとひとりになる。

「俺はひとりなんて全然平気」

優衣がはつと顔を上げる。

「いつもずつとひとりだったから」

裕也がそう言って小さく笑う。優衣の胸がぎゅっと痛む。

「ほら、お前のうちだろ？」

「あ」

気がつくくと、優衣の家の前まで来ていた。

「じゃあな」

裕也が軽く手を振り背中を向ける。え？ 今までなんとなく歩いてきたけど……裕也の家ってこっちなじゃないんじゃ……

もしかしてあいつ……あたしを送ってくれたとか？

裕也はコンビニの袋をぶらぶらと振りながら、今来た道を引き返していった。

11 ひとりぼっち

「え？」

「だから……好きな人いるかどうかは、自分で聞いて欲しいの」

優衣の前で、千夏が驚いた顔をしている。まわりの女の子たちの視線が、自分に突き刺さっているのがわかる。

「でもあんた、聞いてくれるって言ったじゃん？」

「ごめん……やっぱり聞けない」

「どうして!？」

千夏の声が少しうわずる。

「だってそういうことは、自分で聞いたほうがいいと思うから……」
優衣はそう言っただけでちらりと美咲の顔を見た。美咲は顔を赤くして、優衣からすっと目をそらす。

あたし、意地悪かな……こんなこと言っ……

かすかに痛んだ優衣の胸に、千夏の冷たい声が聞こえた。

「わかった。もういいよ。七瀬さんには頼まないから」

そして「行こつ」と、軽く美咲の手を引き、教室を出て行った。

優衣は小さくため息をついて、自分の席に向かう。そのとき、じつと優衣の顔を見つめている恵美と目があつた。

「恵美ちゃ……」

声をかけようとした優衣をさけるように、恵美が席を立つ。

「ちよつとお、千夏ー」

恵美はそう言っただけで、千夏のアートを追っ……そんな恵美の背中を、優衣はぼんやりと見つめていた。

音楽室の窓から夕日が差し込んでくる。部員たちが吹いているバ
ラバラの楽器の音が、なぜか心地よく耳に響く。窓の下の校庭を見
下ろすと、運動部の走り回る小さな姿。優衣は放課後のこの時間が
一番落ち着いていた。

『好きなやつ、いるよ』

窓の外を見つめながら、銀色に光るフルートに唇をつけたら、なぜだか裕也の声が浮かんできた。

好きなやつって……誰なんだろう。

「七瀬さん、今日青木さんは休み？」

突然、優衣の背中に先輩の声がかかる。優衣はあわてて後ろを振り向いた。

「あ、いえ、学校には来てましたけど……」

「また遅刻ー？」

「あたしすぐ呼んできます！」

優衣は楽器を置くと、教室に向かって走った。

校庭から、野球部の掛け声が聞こえてくる。廊下を走る優衣の背中を押すように、楽器の音が流れてくる。

たぶんまだ教室にいるはず……

優衣は教室のドアを開けようとして手を止める。

「七瀬ってうざくない？」

心臓がドクンと音を立てる。

「あの子、三浦と付き合ってるの？」

「さあ？ でもふたりで会ったりしてるらしいじゃん？」

「美咲のこと知ってて、よくそういうことできるよね？」

ドアにかかった手に汗がにじむ。そのとき優衣の耳に信じがたい声が聞こえてきた。

「恵美ー、あんなんでいつも七瀬と一緒にいるわけえ？」

「だってあの子、頭いいじゃん？ テスト前にノート貸してくれるしいい」

「げー、それだけでえ？」

「バカじゃね？」

「バカじゃないって！ つか、そこ大事だったの！」

女の子たちの笑い声の中に、恵美の笑い声が混じる。優衣はぎゅ

つと目を閉じたあと、思い切ってドアを開いた。

「恵美ちゃん！先輩が呼んでたよ！」

彼女たちの視線が優衣に集まる。恵美が驚いた顔をして優衣を見ている。

「早く来てね」

それだけ言ってドアを閉めた。そして音楽室への廊下をまた戻る。足ががくがくと震えていた。立ち止まって息を吸い込む。目を閉じて裕也の声を思い出す。

『俺はひとりなんて全然平気』

あたしだって……ひとりなんて平気……

目を開いて歩き出す。野球部のボールを打つ音が聞こえてくる。優衣の制服にぼたりと涙のしずくが落ちた。

部活が終わって家へ帰る。今日もきつとキッチンには、五百円玉が置いてあって……

なんにも食べたくないな……今日は……

「ただいま……」

いつものように玄関でつぶやく。

「お帰り」

「お父さん？」

優衣の前に父が立っていた。こんな時間にどうして？

「お、お母さんは？」

「いないよ」

「いない？」

「出て行った。麻衣を連れてな」

父はそれだけ言くと優衣に背中を向ける。

お母さんが……出て行った……

だけど今の優衣にはなんの感情もわかなかった。父への憎しみも、母に置いていかれた悲しみも……

そうか……あたし捨てられたんだ……

涙なんて出なかった。きっといつかこの日が来ることを、優衣は
ずっと感じていたから……

12 裕世のこと、好き？

「七瀬！」

部活が終わり、ひとり校舎を出た優衣に、珍しい声がかかった。

「よう、久しぶり」

目の前で笑うのはサッカー部の榎本翔。いや、今はもうサッカー部ではないはず。たしか部員とうまういなくて、部活を辞めたことが聞いたことがある。小学校の頃、やんちゃで目立っていた翔も、中学に入ったらすっかりおとなしくなっていた。

「一緒に帰ってもいいか？」

「べつに、いいけど……」

翔が優衣の前でにかつと笑った。

「七瀬、吹奏楽だったよな？」

いつもの通学路を翔と並んで歩く。そんなこと絶対ありえないと思っていたから、とても不思議な気分だ。

「うん」

「俺、帰宅部。サッカー部辞めちゃったからさー」

翔はさつきからほとんどひとりでしゃべっている。だけどそれはどことなく落ち着きがなく、不自然だった。

なにが言いたいんだろ？ 突然あたしに話しかけてきたりして……

「なんで辞めたの？」

「え？ サッカー？」

「そう」

「いやあ、なんかうまくいなくてさ。部の連中と」

翔はへらへらとそう言ったが、ふと真面目な顔をして空を仰いだ。
「なんか俺、あいつらに嫌われてるし。調子こくんじゃねーよとか

……」

優衣は黙って翔の横顔を見た。翔はそんな優衣を見て照れたように笑う。

「七瀬もさ、俺のこと嫌いだろ？」

翔の後ろを何台かの車が通り過ぎる。

「俺、小学校の頃、お前のこといじめてたもんな？ ガキだったよな」。ほら、俺って、好きな子いじめちゃうタイプだからさ」

好きな子？

優衣が黙っていたら、翔は困ったように頭をかいた。

「だからさー、俺、お前のこと好きなわけ。わかる？」

「え？」

「だ・か・ら！ 俺、七瀬が好きなの！」

優衣が立ち止まって翔を見る。翔が赤い顔をして優衣を見ている。

「七瀬は……付き合ってるやつとか、いるの？」

優衣は首を横に振る。

「じゃあ、好きなやつは？」

翔の声を聞きながら、裕也の言葉を思い出した。

『好きなやつ、いるよ』

「ごめんなさい……あたし……」

「もしかして、裕也のこと、好き？」

優衣が顔を上げて翔を見る。翔はじつと優衣のことを見つめている。

あたし……裕也のことを好き？

翔は答えを聞く前にニツと笑う。

「俺が言うのもなんだけどさー、お前ら絶対両思いだと思ってんだよね？ 俺的には」

「あ、あたしは……」

「顔赤い」

優衣が両手でぱつと顔をかくす。

「うそうそ」

翔はおかしそうに笑って、そしてつぶやく。

「裕也だつたら……仕方ないかな……」

ふたりの間を湿った風が吹き抜ける。

「もういいや。ごめん、今俺が言ったこと、全部忘れて！」

「あ、あのっ、あたし」

「じゃあなっ！」

翔がそう言って背中を向けて走り出す。そんな翔の背中を、優衣はぼんやりと見つめていた。

13 雨上がりの坂道

雨は何日も降り続いていた。優衣は自分の部屋の窓から雨のしずくを見つめる。

今日も学校休んじやったな……

頭が痛くて一日休んだ。まだ痛かったからもう一日休んだ。そうしたらなんだかずるずるして……雨が降り出してからずっと学校へ行っていない。

なんか、もう、面倒くさい……

優衣がふうつとため息をついたとき、家のチャイムが鳴った。

お母さん？

ふとそんな気持ちがよぎり、二階の窓から下を見下ろす。すると黒い傘の影から、裕也が顔を出して優衣を見上げた。

「なんで学校来ねえんだよ？」

裕也がふてくされた顔で、玄関に立っている。

「俺はちゃんと行ってるんだぞ？ お前に言われたから」

ああ、そういえば、そんなこともあったっけ……

「聞いているのか!？」

「なによ、たまに真面目にしてるからって、えらそうにするそんな優衣の腕を、裕也がぎゅっとなつかんだ。」

「な、なに？」

「俺が連れていってやるから。早く支度しろ」

優衣はぼんやりと裕也につかまれた腕を見る。

「ほら！ 早くしろよっ!」

裕也は腕から手を離すと、ぽんつと優衣の肩を押した。

雨は小雨になっていた。学校はもうとっくに始まっている時間だ。もしかして裕也、登校してからわざわざうちに来たの？

優衣は水溜りをよけながら、隣を歩く裕也の雨に濡れたスニーカーを見つめる。

やがてどんよりとした雲の隙間から、かすかな光が漏れてきた。裕也が傘を閉じたから、優衣も同じように傘を閉じる。すると裕也は学校への道ではなく、左に曲がって坂道を上り始めた。

「裕也？」

優衣があわててついていく。その道は　あの『お化け屋敷』へと続く道だった。

裕也が住んでいたあの家に、今は誰も住んでいないようだった。

「ちよつと、裕也！ やめなよっ」

優衣の言葉も聞かないで、裕也はつたの絡まった門を乗り越え、中から鍵を開ける。

「学校行くんじゃないやなかったの？」

「うるせえなあ、お前は」

裕也がそう言って笑いながら、濡れた草をふみしめ玄関へ向かう。優衣も恐る恐る裕也の後を追いかけた。

「やつぱ開かねーや」

「当たり前でしょ？」

裕也が玄関のドアをガチャガチャとひっぱる。そして開かないことがわかれると、草の生い茂った庭へ回った。

あそこにシロがいたんだよね……

裕也の背中を見ながら、シロのことを思い出す。今にも先だけ白いしっぽを振りながら、シロがワンワンと吠えてきそうだ。すると裕也が窓ガラスを乱暴に足で蹴りつけた。

「な、なにやってんの！？」

優衣の叫び声と同時に、何かがはずれたような音がして、裕也が窓ガラスをガタガタと動かす。

「開いたよ」

「えっ」

「この窓の鍵、壊れてんだ」

「そう言っつて、裕也が家の中へ入り込む。」

「ちよっと！ ダメだよ！ 不法侵入だよ！」

「誰も住んでないんだから、大丈夫だつて」

裕也は笑つて、優衣に向かって手を伸ばす。

「ほら、早く入れよ」

優衣はそつとその手に触れる。初めて触れた裕也の手は、思ったよりずつと温かい。裕也は優衣に小さく笑いかけると、ぐいつとその体を引つ張り上げた。

14 カッコウ

裕也に手を引かれるまま、階段を上る。二階のあの部屋に着くと、裕也がベランダの窓を開けた。

「わあっ」

優衣が思わず声をあげる。窓から雨上がりの風が吹き込んで、優衣の前髪がふわっと揺れる。ベランダに出ると、あの日と同じ景色が広がっていた。

「変わってないね」

「変わるわけないよ」

眼下に見える家並みも、向こうにある学校も駅も、この狭くて小さな街も……何も変わらない、変わっていない。そしてその変わらない世界で、自分たちは今日も生きている。

「七瀬さー」

優衣の耳に裕也の声が、風と一緒に流れてきた。

「お前、女子にハブかれてんじゃね？」

「え……」

心臓がとくとくと音を立てる。裕也はなんでも知ってるような顔をして、優衣に笑いかける。

「な、なによ。あんたのせいなんだからねっ」

「俺のせいー？」

裕也がそう言いながら、空を見て笑い出す。

「なんで俺のせいなんだよ？ 女ってわっかんねー！」

優衣はぼんやりと、そんな裕也の声を聞く。その横顔にある、新しくできたあざを見つめながら。

「……裕也は、強いよね？」

いつかの、ランドセルを背負った裕也の言葉が浮かんでくる。

『殴られたんだ、お母さんに』

「強い？ 俺が？」

「うん。裕也は泣かないもん。いつも」

優衣はそうつぶやいて前を見つめる。庭の茂みから一羽の鳥が飛び立って、晴れ間ののぞきはじめた空へ、翼を羽ばたかせて飛んでゆく。

鳥になれたら……

優衣の胸にその想いがよみがえる。

自由に飛んでいけるのに……

空を見上げる優衣の耳に、裕也の声が聞こえてきた。

「七瀬。カツコウって鳥、知ってる？」

「カツコウ？」

優衣が視線を裕也にうつす。裕也はいつものように少し笑って優衣を見る。

「カツコウってさ、他の鳥の巣に卵産んで、どっか行っちゃったんだ。自分は子育てしないでさ」

優衣の胸がきゅっと痛む。

「しかも産まれたヒナは、巣の持ち主の本当の卵を、下に落として割っちゃったんだぜ？」

裕也がそう言って冷めたように笑う。

「ま、俺はそんなことはしないけど。慎吾のやつ、けっこうかわいいし」

優衣はそんな裕也に向かってつぶやく。

「裕也は……本当のお母さんに会いたって思わない？」

「思わないね」

裕也の黒い髪が風に揺れる。

「向こうだって会いたくないだろ？ せっかく邪魔な子供を捨てて、のびのびと飛び回っているってのに」

「そうかな……」

「そうだよ」

優衣から顔をそむけた裕也の声が、いつも以上にかすれていた。

あたしは……会いたいな……お母さんに。

だけどそれは叶わない願い。

あたしも、お母さんに捨てられたんだ。

優衣は唇をかみ締め、その言葉を胸に押し込む。裕也は黙って空を見つめている。

「でも俺……いつか絶対、この街出るから」

裕也が独り言のようにつぶやいた。

「そしたら、どこまでも飛んでいく。親も、家も、学校も、全部俺が捨ててやる」

優衣はぼんやりと裕也の横顔を見る。裕也はそれ以上なにも言わずに、ただ空を飛ぶ一羽の鳥を目で追っていた。

授業の終わった教室は、たくさんの音であふれてかえっている。女の子たちの笑い声、男の子たちのふざけ声。机と椅子のぶつかり合う音、窓を閉める音、ドアを開ける音。そしてみんな思い思いの場所へ向かって、教室から出て行く。

優衣も教科書をバッグに入れると、楽器を持って立ち上がった。恵美が千夏たちとくすくす笑っているのがわかる。

へいき。こんなのへいき。あたしには好きな場所があるから。優衣は今日もひとりで音楽室へ向かう。窓からは梅雨明け間近の青い空が見えた。

「恵美、部活辞めるってー？」

「マジ？でもありえるかもー」

「あの子、やる気なさそうだったもんねえ？」

楽器の音に混じって、部員たちのおしゃべりが聞こえる。優衣はそんな声を聞きながら、フルートに唇を当てる。窓の下からは運動部の掛け声が今日も聞こえてきた。

部活が終わって校舎を出た。空にはまだオレンジ色の光が残っている。

「優衣」

突然声がかかって振り向いた。そこには久しぶりに見る亜紀の姿があった。

「亜紀ちゃん……」

「ひとり？」

「うん」

「一緒に帰らない？」

亜紀がそう言って少し照れくさそうに笑う。

「……うん。いいよ」

優衣の声に、スポーツバッグを肩にかけ直しながら、亜紀が並ぶ。そしてふたりはゆっくりと歩き出す。

小学校以来だった。亜紀とこんなふうに並んで歩くのは……やがて亜紀がぼつりとつぶやく。

「ずっと、優衣と話したかったんだけど……いつも一緒にいる子がいたでしょ？だからなんとなく声かけにくくて」

「亜紀ちゃん」

亜紀が優衣を見てにこっと笑う。優衣もいつの間にか亜紀の隣で笑顔を見せる。

「久しぶりだね。一緒に歩くの」

「そうだね。なんか懐かしいね」

ふたりはそう言って笑った。夕焼け空の下、ふたりの影が長く伸びていた。

「ただいま」

家には薄暗い灯りがついていた。この時間に父が帰っているのはめずらしい。

「お母さん？」

優衣は思わずつぶやいていた。玄関に女性の靴が揃えてあったからだ。優衣は急いで靴を脱いで、真っ先にキッチンへ向かう。

「ただ……そこにいたのは母ではない女性だった。」

「お帰り、優衣」

冷蔵庫から缶ビールを取り出しながら父が言う。知らない女性は椅子に座ったまま、優衣に向かってほんの少し会釈した。

「優衣、話があるんだ」

父はテーブルにビールを置くと優衣に言う。優衣は突っ立ったまま、手に持っているバッグをぎゅっと握った。

「父さん、この人と一緒に暮らしたいと思ってる」

父の声は優衣の耳を、右から左へすうっと通り過ぎる。

「優衣は嫌か？嫌だったら、北海道のおばあちゃんが、おいでって言ってくれてる」

優衣は黙っていた。

「どうする？優衣」

お父さんはずるい。そんなこと、あたしに聞くなんてずるい。

「あたし、おばあちゃんちに、行く」

「……そうか」

父は心なしかほっとしたような表情をした。

あたし、お父さんにも捨てられたんだ……

優衣はちらりと女性の顔を見たあと、何も言わずに背中を向ける。そして今脱いだばかりの靴を履き、外へ飛び出した。

外はもう薄暗かった。優衣はただひたすら通学路を走った。

ライトをつけて走る車が優衣を追い越し、歩道沿いに立つ木が風に揺れる。蒸し暑い空気が、全身を膜みたいに覆っている。

気がつくとも優衣は、いつか裕也と会った公園に立ち止まっていた。息を大きく吐いて両手をひざにつく。

「裕也……」

なぜか裕也に会いたかった。

「裕也あ……」

いつもみたいに、ひよっこり自分の前に現れてほしかった。

もう、裕也に会えなくなる……

そう思ったら涙があふれた。後から後からあふれてきた。そしてそんな優衣の上から、雨がぽつりと落ちてくる。

突然の夕立に、道路を歩く人たちが早足で通り過ぎる。優衣の足元がみるみるうちに湿っていく。

ただ優衣はその場を動かなかった。自分の髪を顔を服を濡らしてゆく雨が、涙までを洗い流してくれる気がした。

「七瀬？」

降りしきる雨音に混じって声が聞こえる。振り向かなくても優衣

にはわかった。今一番聞きたいと思っていた彼の声。

「なにやっつてんだよ！？こんなところで」

自転車を地面に倒して裕也が駆け寄ってくる。優衣は雨に濡れた顔で、そんな裕也のことを見る。

「七瀬？どうした？」

優衣は黙って首を横に振る。

「なんでもない」

裕也がじつと優衣のことを見つめる。雨は激しくふたりの上から降り続く。

よかった、雨が降ってて……あたしの涙見られなくて……

するとそんな優衣の手を、裕也がそっと握った。

「送ってやるよ、チャリで」

「え、いいよ」

「遠慮するなっつて」

歩き出す裕也の手を優衣がそっと払う。

「いいの。うちになんて帰らなくて」

裕也が振り返って優衣を見た。

「うちになんて……帰りたくない」

ヘッドライトをつけた車が、水溜りを跳ね上げながら、公園脇を走り去る。遠くで救急車のサイレンが、寂しげに鳴り響く。

「じゃあ、どこか行こうか……」

裕也の濡れた手が、もう一度優衣の手を握る。

「ふたりでどこか行っっちゃおうか？」

優衣が顔を上げて裕也を見る。裕也はいつものように少し笑って、握った手をひっぱった。

16 どこにも行けない

「キヤー！裕也っ、スピード出しすぎだよお！」

「だいじょうぶだつて！ビビリだなあ、七瀬は」

雨で濡れた街を裕也の自転車で走る。渋滞の車のライトを、街に灯った灯りを、自転車でぐんぐん追い越していく。いつの間にか空から落ちていた雨はやんでいた。

「あぶないよっ！こわいってば！」

「じゃあ、しつかりつかまってる！」

裕也の右手が優衣の腕をつかみ、ぎゅっと自分の腰に巻きつける。優衣の濡れた体が裕也の背中にぴたっと張り付く。優衣は思わず目を閉じて、その体のぬくもりを感じ取る。

そしてその時ふと、小学生の頃の裕也の姿が目に見えかんだ。

『殴られたんだ、お母さんに』

あの雨の日。裕也は傘もささないで、ひとりで水溜りを蹴飛ばしていた。さつき、雨に涙を洗い流してもらった優衣のように……

もしかしたら、裕也も泣いてたかもしれない。

『裕也は、強いよね？』

『強い？俺が？』

『うん。裕也は泣かないもん。いつも』

優衣の胸にいつかの会話がよみがえる。

「どこ行きたい？」

風に流れて裕也の声が聞こえてきた。優衣は少し考えて答える。

「……どこでも」

このまま、裕也と一緒になら……

背中を向けた裕也が小さく笑って、自転車のペダルをぐんつと踏み込んだ。

本当は優衣もわかってた。自分たちはまだ中学生で、大人がいな

ければ生きていけなくて……本当はどこにもいけないってこと。鳥みたいに飛んでいくことなんて、できないってこと。

「腹減ったー」

川沿いの土手に自転車を止めて、裕也がごろんつと草むらに寝転ぶ。優衣は隣にしゃがみこんで、そんな裕也の顔をのぞきこむ。

「ご飯食べてないの？」

「うん。お前は？」

「あたしも」

優衣はそう言うと、ごそごそと制服のスカートのポケットをあさって、小さなキャンディーをふたつ取り出した。

「さっきもらったんだ。亜紀ちゃんに」

「亜紀？お前あいつと最近しゃべってないだろ？」

「でも今日一緒に帰ったの。久しぶりに」

優衣はキャンディーのひとつを裕也に差し出す。

「あげる」

裕也は「サンキュー」と笑って、優衣の手からキャンディーを受け取った。

空には、さっきの夕立が嘘のように、こぼれ落ちそうな星空が広がっている。川から吹いてくる風が、なんとなく気持ちいい。

優衣はキャンディーの包みを開けて、口に放り込む。そして濡れた草むらの上に座って、裕也に言った。

「けど裕也。どうしてあたしが亜紀ちゃんとしゃべってないとか、女の子たちにハブかれてるとか、知ってるのよ？」

裕也は寝転んだまま、キャンディーを口に入れる。

「どうでもいいだろ？そんなの」

「よくないよっ。どこであたしのこと見てるのよ？やらしー」

裕也がおかしそうに笑って、草むらの上に起き上がる。横を見ていた優衣の目が、ちょうど裕也の目と合った。

「うるせーな。誰だっけ好きなやつのは気になるだろ？」

好きなやつ？

裕也は優衣から目をそらすと、立ち上がって大きく伸びをした。

「あーあっ！ 飴玉一個じゃ、足りないっつーのっ！」

好きなやつって、好きなやつって……もしかしてあたしのこ
と？

「行く？」

「え？」

裕也が優衣のことを見下ろして言う。

「もっと遠くに行く？」

優衣は黙って顔を上げる。薄暗い中で裕也の真っ直ぐな目を見た
ら、心臓がおかしいほどドキドキしてきた。

「……もういい」

そうつぶやく優衣の髪を、風がそつと揺らす。

「もう……帰らなきゃ……」

父親と知らない女がいるあの家に。母と妹のいないあの家に。

そしてあたしはあの家を出て、北海道に行かなきゃいけない
の……

「ごめんね……裕也」

優衣はそう言って立ち上がる。雨で濡れた制服がずしりと重い。
顔を上げて裕也を見た。裕也は何も言わずに優衣のことを見てい
る。

「裕也……あたし……」

その時、ふたりの姿をまぶしいライトが照らした。

「君たち！ そんなところで何をしているんだ！」

土手の上からパトロール中の警官が、優衣たちのことを見下ろし
ていた。

駅前の交番を出て、優衣は父親と一緒に歩いた。

『中学生がこんな時間に、こんな川原で何をしていたんだ？』

優衣と裕也は警官に問い詰められて、交番まで連れて行かれた。

すぐに親に連絡されて『迎えにくるように』と伝えられた。

10分もすると優衣の父が迎えに来て、優衣はすぐに帰されたけど、裕也の親が来る気配はなかった。

「優衣」

隣を歩く父がつぶやく。

「悪いのは全部父さんだよな」

優衣は何も言わずに、ぼんやりその声を聞いていた。低くて頼もしいと思っていた父の声。でも今はその声を聞きたいとは思わなかった。

「もし北海道に行くのが嫌なら……」

「嫌じゃないよ」

優衣がつぶやく。

「あたし嫌じゃないよ？」

父が自分を見ているのがわかる。

「あたしおばあちゃんちに行く」

自分はまだ中学生で、少し遠くに行っただけで、すぐに連れ戻されてしまう子供で……大人がいなければ生きていけない。

鳥になんて、なれるわけない……

優衣は顔を上げて星空を見る。そして、交番を出る自分の姿を見つめていた裕也の目を思い出し、そつとまぶたを閉じた。

16 どこにも行けない(後書き)

いつもお読みいただき、ありがとうございます。

明日(29日)の更新はお休みします。

よろしく願います。

17 絶対行くから

チャイムが鳴ると同時に、教室中がざわめきだす。明日から夏休みという開放感が、いつもよりも教室を明るくしている。

優衣は立ち上がるとひとり教室を出た。今日は部活もないし、このまま誰とも話さずにまっすぐ帰るつもりだった。

廊下でバレー部の女の子たちと話している亜紀を見かけて、一瞬立ち止まったけど、やっぱり声をかけずに下駄箱へ向かう。

そして靴を履き替えたとき、優衣の視界に翔の姿が見えた。男子も女子もグループになって楽しそうに下校する中、翔はひとりぼっちで歩いていた。まるで今の自分のように……優衣は思わず駆け出して、そんな翔の名前を呼んだ。

「え？転校？」

立ち止まった翔は、優衣の前で驚いた顔をしていた。

「うん。夏休みの間に引っ越すの」

「どこに？」

「北海道」

「北海道！？」

翔がさらに驚いた顔をした。

「そう、あたし北海道のおばあちゃんちに行くの。親が離婚したから」

さらりと言ったつもりだった。このまま、他の誰にも言わずに、夏休みが終わったらいなくなっているつもりだった。いつかの裕也みたいに……

「だから……いろいろ、ありがとうね」

「……俺、べつに何もしてないし」

「そうだよ……じゃあ」

優衣はそう言って翔に背中を向ける。そんな優衣に翔が声をかけ

る。

「裕也には言ったのかよ？」

優衣がゆっくりと振り返る。

「裕也は知ってるのか？お前が引つ越すこと」

静かに首を振る優衣に、翔が歩み寄る。

「なんで、言わないんだよ？」

「なんでって……誰にも言わないつもりだったから……」

「でも俺には言ったじゃん？だったら裕也にも言えよ」

裕也には……言うつもりはなかった。

言ったら……言ったらきつと、あたしこの街を離れたくなくなる。

「ごめんね……裕也には言わないで」

「おいっ！七瀬！」

優衣は翔の声を振り切るように、家まで走って帰った。

『明日おばあちゃんちに行きたい』

その日の夜、優衣は父にそう言った。いくらなんでも急すぎるという父の忠告を振り切って、優衣は夜のうちに身の回りの荷物をまとめた。あとのものは父に送ってもらえばいい。

とにかく一刻も早くこの街を出たかった。そうしないと、きつと気持ちが悪くなる。北海道になんか、行きたくないって思ってしまう。

優衣は荷物をまとめると、布団を頭までかぶった。外はもうかすかに明るくなっていた。

翌朝、駅まで送ると言う父の言葉を振り切って、優衣はひとりで家を出た。空は青く晴れ渡っていて、朝から太陽の光が、じりじりと肌を照り付けていた。

優衣は駅への道をひとり歩く。その道は、小学校や中学校へ通う通学路。そして途中の丁字路にさしかかったとき、優衣はふと足を止めた。この道を左へ曲がれば、あの『お化け屋敷』がある。裕

也と一緒にこの狭い街を見下ろした、雨上がりの日を思い出す。
その時、優衣の耳に自転車のベルが聞こえた。ゆっくりと振り向くと、そこには自転車に乗った裕也の姿があった。

「なんで黙って行くんだよ？」

裕也が怒った顔で言う。

「翔に聞いたの？」

「今朝、あいつから電話があった」

「言わないでって言ったのに……」

優衣はそうつぶやくと、歩き出した。

「七瀬っ！待てよ」

そんな優衣の前に、裕也が立ちふさがる。

「なんで北海道なんだよ！？なんで俺に黙って行くんだよ！？」

「しょうがないじゃん！あんただって黙って行つたくせに！あたしあるとき、泣いたんだからね！いっぱい泣いたんだから！」
そう言ったあと泣きたなくなった。だから優衣は裕也を振り切り歩き出す。

「七瀬っ！」

裕也が優衣の前に自転車を止める。

「……駅まで、送る」

優衣は黙って、自分を見つめる裕也の顔を見た。

道端に咲くひまわりが揺れている。小学校の裏の林にセミの鳴き声が響き渡る。

裕也は自転車をこぎながら、ずっと黙ったままだった。優衣も何も言わずに、そんな裕也の背中を見つめていた。

住宅街を抜けると交通量が多くなってきた。自転車で走れば、駅なんてすぐについてしまう。優衣は唇をかみ締めて、裕也の白いTシャツをそっとつまむ。指先だけにほんの少し力を込めて……

「七瀬」

優衣の耳に、裕也のかすれた声が聞こえてくる。

「俺、絶対行くから」

見慣れた街並みが、優衣の前をぐんぐん過ぎていく。

「俺、いつかこの街出て、絶対北海道に行く。だから……」

優衣の目から涙があふれた。泣きたくなんてないのに……絶対泣かないと思ってたのに……いつもの景色が、裕也の背中が、ぼんやりかすんでもう見えない。

「だから泣くなよ」

裕也が前を見たままそう言った。自転車のペダルをぐんぐんと踏み込み、スピードがかすかに上がる。

優衣は泣きながら顔を上げた。自転車が風のように、この狭い街を駆け抜ける。緑の丘の上に洋風の建物が、木の隙間から少しだけ見える。

裕也が右手で優衣の手をつかんだ。そして自分の背中にくっつけるように、優衣の体をぐっと引き寄せる。優衣はそのまま目を閉じて、裕也の背中に濡れた頬をそっとよせた。

17 絶対行くから（後書き）

いつもお読みいただき、ありがとうございます。

次回、最終話になります。

あとほんの少し、お付き合いしていただければ幸いです。

18 カッコウの飛び立つ日

あたしたちはまだあのとき中学生で、『好き』とか言ったわけでも、『約束』とかしたわけでもなくて……ただあのときのあたしと裕也は、確かにつながっていた。心のずっと奥のほうで、きつと確かにつながっていたんだ。

「ゆーいっ！」

音楽室から校庭を見下ろしていたあたしに、カナがおどけた口調で声をかけてきた。カナは、あたしが北海道に引越してきてからずっと一緒に『親友』ってやつだ。でもずっと一緒に今日で最後。今日の卒業式が終わったら、あたしたちは別々の道へ進む。

「なに？」

「なにじゃないよー。いつまでひとりで思いにふけてんの？朋樹たちが呼んでたよ？優衣のこと」

そう言いながら、カナはあたしの隣に立って、一緒に雪の残る校庭を眺める。

「はあー、さむー」

だけど外から冷たい風が吹き込んで、カナはすぐに窓を閉めた。

「ねえ、優衣。あんた、朋樹の気持ちわかってるんでしょ？」

窓を閉めると、カナがあたしに向かって言う。

「朋樹のこと、嫌い？」

「……嫌いじゃないよ」

「でしょ？だったら付き合ってあげなよー。あいつ何年あんなことと想って……」

「ごめん。あたし誰とも付き合うつもりはないから」

カナがふうーっとため息をつく。

「優衣さ、そうやって『誰とも付き合わない』『好きな人もいない』って言ってる間に、女子高生ライフ終わっちゃったじゃない？もっ

たいたいよ、あんたかわいいのに」

あたしがかわいい？あたしは自分のことかわいいなんて一度も思ったことない。あたしって人付き合いもよくないし、カナみたいに素直に笑えないし。

「まあ、いいけどさ。べつに」

カナがちよっと首をかしげてにこつと笑う。あたしはバッグの中からチョコレートを取り出して、カナにひとつあげた。それから自分の分も手にとって口に入れる。キャンディーみたいに包んである、甘いミルクチョコレート。あたしはまた窓の外を見た。

来るわけなんかない。あいつがここに来るわけなんかない。だってあたしたちは何の約束をしたわけでもないし……

口の中でチョコレートがとろりと溶ける。カナが「そろそろ行こつ」と言って歩き出す。だけどあたしはその場を動くことができなかった。

「裕也……」

誰もいない校庭の隅っこで、野良犬とじゃれあうようにしている人影。その姿は遠くて小さいけど、あたしにはわかった。裕也の姿が、あたしにはわかった。

「優衣！？どこ行くの!？」

音楽室を出ようとしていたカナを押しつけ、あたしは廊下を走る。階段を駆け下り、上履きのまま、玄関を飛び出した。

雪の積もる山から吹き降ろす冷たい風が、あたしの頬を叩く。上着を着てないあたしの体を、一瞬で冷えた空気が包み込む。

白い息を吐きながら立ち止まった。しゃがみこんで、茶色い犬の頭をなでている背中が目の前に見える。やがて、あたしと同じように白い息を吐きながら、裕也が振り向いてつぶやいた。

「さっみーなあ、こじ」

あたしの大好きな、少しかすれた男の子の声。その声はあの頃と全然変わってない。裕也は立ち上がると、黒くて長めの前髪を右手

できあげて、あたしの前で笑う。

「来たよ」

「……うん」

そう言っただけで、あたしは、涙の笑顔を見せる。そして裕也が、ほんのり茶色く染めたあたしの髪を、くしゃっとなでた。

これは夢かな？夢かもしれないな？だって、本当に裕也が来てくれるなんて、ありえないでしょ？

校舎の窓からみんなが騒いでいる。きっとカナは目を丸くしてあたしのことを見ているだろう。朋樹には悪いことしちゃったな……ごめんね。

「なんか、腹減った」

あたしの髪から手を離れた裕也が、いたずらっぽく顔でそう言った。

「チョコレートなら、持ってるよ」

あたしがポケットの中からふたつのチョコレートを取り出す。茶色い犬がしっぽを振って、くんくんにおいをかいでいる。いつ裕也に会ってもいいように、あたしは毎日チョコレートをポケットの中にしのばせてたんだ。

「さんきゅっ」

裕也は笑って、ひとつを口に放ると、もうひとつをあたしの手に握らせた。裕也の手の温かいぬくもりが、あたしの手を伝わって胸の奥に入り込む。

あたしはそのチョコレートを口に入れて、空を見上げる。青く澄んだ空を、1羽の鳥がすうっと横切ってゆく。

その日、裕也と食べたチョコレートは、今までで一番甘い味のするチョコレートだった。

18 カッコウの飛び立つ日（後書き）

最後までお付き合いいただき、どうもありがとうございます。いつも読んでくださった方、お気に入り登録してくださった方、評価、感想をいただいた方、本当に感謝しております。

素人の書いた拙い文章ですが
たまたま読んでくださった方の心になにか少しでも感じてもらえるものがあればいいな……と思います
このお話を書きました。

ここまで読んでいただきまして
本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4162/>

カッコウの飛び立つ日

2010年10月26日12時40分発行